

ホッケーの普及活動と歴史に関する研究

A study on the popularization and history of Hockey

1K07B518-7 奈良美理

指導教員 主査 友添秀則 先生 副査 杉山千鶴 先生

【動機・目的】

私は中学から現在までホッケー競技を続けている。その中で常々感じてきたことがある。それは、「ホッケー」という競技の認知度が大変低く、限られた地域でしかこのスポーツがおこなわれていないということである。「ホッケー」というと「アイスホッケー」をイメージされがちであり、また、私の住む飯能市は、「ホッケーのまち」としてうたっているにもかかわらず、チーム数は少なく、中学校では部として活動しているのは1校だけである。この現状を改善し、ホッケーを広めたいという思いからこのテーマ設定に至った。本論文ではホッケーがこれまで辿ってきた歴史を明らかにしながら、埼玉県におけるホッケー競技を広めていくための方策を考察する。

【方法】

本研究は文献や資料、雑誌等の講読による。

【第1章】 世界におけるホッケー

第1章では、世界にホッケーが誕生してきた経緯を明らかにする。ホッケーの起源から、近代におけるホッケー成立するまでの様子を時系列的に述べ、オリンピックをはじめとする国際大会の結果を調べることで、各国のホッケーの状況を明らかにした。ホッケーは、有史以前からスティックのような棒とボールを使った遊びとして存在していたことが記録として残っており、その遊びとしてのホッケーが徐々に未発達なゲームとして進化し、ルールが統一されることで現在のホッケーへと確立された。国際大会では、ホッケーの伝統国を押しつけてインドやパキスタンの活躍が目立っていたが、人工芝導入などをきっかけに戦績が下降し、現在ではやはり伝統国であるヨーロッパ勢がトップを占めている。

【第2章】 日本におけるホッケー

第2章では、第1章を受けて日本におけるホッケー成立までの経緯を述べる。イギリス人によって慶応義塾に伝えられたことが日本のホッケーの始まりである。学生を中心に人気を集め、各大学や大学OBチームを中心

に広められていく。徐々にチーム数が増えた頃、現在の「社団法人日本ホッケー協会」の前身である、「大日本ホッケー協会」が設立される。母体となる団体が設立されたことで、様々な大会が行なわれた。その後、日本のホッケーは国民体育大会の発展とともに全国展開が進み、オリンピック出場やトップリーグの誕生へと発展していく。オリンピックの活躍では、男子日本代表に関しては、近年さまざまな不運が重なり、大会出場権獲得にすら至っていない。女子はここ2大会連続大会出場を決め、力をつけてきたことを世界各国へ証明しつつある。

【第3章】 地域におけるホッケーの定着：埼玉県と岐阜県を取り上げて

第3章では、第2章で明らかになったホッケーの各県への普及に焦点を当て、私の所属してきた埼玉県飯能市のホッケーの取り組みと、オリンピック選手を数多く輩出している、ホッケーが盛んな岐阜県各務原市のホッケーの取り組みを明らかにした。やはり埼玉県でも国体を契機にホッケーが普及しはじめ、特に社会人チームは優秀な成績を収めてきた。2度の国体を終えた今でも、国内大会の誘致を積極的に行ない、さらなるホッケーの発展を目指す。岐阜県においては、日本代表強化合宿地や国際試合を開催するなど、その取り組みは、日本のホッケーの中心と言えるほどである。それぞれを比較しながら、「一貫体制」「指導者の確保」「環境」のポイントに絞り、ホッケーが地域に定着する方法を提示した。

【結章】 本研究のまとめ

結章では、各章を振り返り、本研究のまとめを行なう。第2章で明らかになった、日本においてホッケーは国民体育大会を契機に発展してきたということを手掛かりに、埼玉における今後のホッケーの普及策を提示した。また、マイナースポーツとされるホッケーにとってのオリンピックの重要性を指摘した。メジャースポーツや地域に根付いたスポーツを目指すために、これまで提示した方法によってホッケーが強化されることを期待する。